

事例発表①

「県立西部図書館における テキストデータ化サービスについて」

講師：千葉県立西部図書館

副主査 松井 進

1 テキストデータ化サービスの背景

千葉県立西部図書館は、開館当初から録音図書の製作を開始していた。当初製作していたのはカセットテープによる録音図書であったが、現在はデジジーという形式のデジタル化された録音図書となっている。録音図書の製作は時間がかかり、1冊あたり約1年、西部図書館では学術書を中心に作成しており、完成まで3年を要したものもある。すぐに読みたいというニーズに応えられず製作時間の短縮が課題であった。より早い提供方法を考え、3年間の試行期間（テキストデータ実証実験）を経て、平成27年にテキストデータ化サービスを本格実施した。

2 テキストデータとは

パソコンの合成データで読める文字データのこと。主な特徴としては、録音図書に比較して迅速に提供できる、希望に応じて校正ができる、文字検索ができることなどが挙げられる。利用方法も多彩にあり、利便性・汎用性の高いデータ形式である。デメリットとしては、構造化された動きができない、誤読が多くなる、専門用語に弱いというところがある。

3 テキストデータ化サービスについて

テキストデータの製作に当たり、テキスト訳者養成のための講座を行った。この講座で研修を受けた後、実際の作業活動に参加してもらっている。テキストデータ化の提供の流れは、テキスト化したい本を送ってもらい、資料を断裁してPDFファイルにする。それを章ごと等に分け、ボランティアの方たちに校正作業をしてもらい、図書館でとりまとめたものを利用者へ、という形で行っている。

3年間の実証実験で計32タイトルを製作した。1冊の本を約1か月で製作するこ

とを目標としている。録音図書の製作に約1年かかっていたことと比べると、作業日数は、録音図書の8分の1で製作できることもわかった。

利用者へのヒアリング調査によると、全体的には満足度が高く、「早く読めるのでテキストデータの方がよい」、「1回の校正でも十分読める」等の感想を頂いた。反対に「肉声音声で聞ける録音図書の方が良い」、「テキストデータを聞くための機器の操作が難しい」という声もあった。利用者の年齢によりギャップがあるのかなと感じている。

私がテキストデータ化サービスについて申し上げたいのは「はやい、安い、不味い」ということ。しかし、それで良いと思っている。多少誤読があっても、取りあえず内容が分かる。活字の本でも斜め読みをしているときがあるはずだが、合成音声だと、検索機能もあるのでそれと近いことができるようになる。

4 今後の課題

録音図書と同等のクオリティを確保することが課題である。図表や写真の処理を行うと精度は高くなるが、製作に時間がかかり、速報性が担保できなくなる。今後も利用者の意見を聞きながら、新しい仕組みをつくっていきたい。

最終的な目標は、アクセシビリティに配慮した電子書籍が発売され、すべての図書館で利用できることであるが、残念ながら、それは当分先になりそうである。図書館は最終的にはデータを作るところではなく、データを提供するところということはいくぶん分かっている。しかし、今は目の前にいる利用者が読みたいという本を取りあえず読める方法として、テキストデータ化サービスを行っており、速報性を担保しながら情報提供をしていきたいと考えている。



(講義中の松井講師)